私の戦争体験

新井チカ
白鷺二丁目

昭和二〇年に入り、米機の空襲は日夜の別なくいよいよ激しさを増してきました。

この頃、私たち一家は板橋区中丸町に住んでいました。

既に夜もモンペ姿のままで布団にごろ寝をする始末でした。熟睡など到底ままならない状態で日夜恐怖にさらされていたのです。

そして、遂に三月十日の東京大空襲の夜を迎えたのです。この付近にもB29の爆撃を受けました。落雷の如き凄じい光と轟音とともに、夜空を焦がす一面の猛火と烈風が舞い上がりました。川越街道を隔て、東上線大山駅寄りが焼けたのです。反対側の方向(私共の辺り)は幸い難を免れました。

夜が明けると近くの路上には、上半身に薦(こも)を被せた六体もの死体が並べられていたのです。この街道を境に人々の運命が左右されたのです。その翌日、東京の空襲を知った父が、以前から疎開の準備を進めてくれていましたので、大型トラックで来てくれました。父は、このトラックが空車で帰るのではと、私の所に近づくにつれ、「首を伸ばしながら来たよ」と興奮状態でした。

やがて、私たち家族四人は住み慣れた我家を後に、疎開地、茨城県の森戸村へと、荷物と共にトラック上の人となりました。途中、何度かの空襲に出会っては下車し避難しました。東京での道路のあちこちには、電線がぶら下がったり、倒れ掛かったりの無惨な状況でした。

一歳半を過ぎたばかりの娘は、私の背中にしがみ付いて、唯々泣き叫ぶばかりでした。こんな状態をやっと潜り抜けての疎開地までの道のりは、それぞれに筆舌には尽くし難いものがあります。時はどんなに流れても、今も忘れることは出来ません。

疎開地にあっても、B29の機上からは「最早竹槍では勝てぬ」などの紙切れが飛ばされたのです。思えばあの頃から戦争は末期だったのでしょうか。

こうして、第二次世界大戦は止まることを知りませんでした。村の若者達の多くは出征してしまい、老人や子供達が残されて

いたのです。父の所でも三人の息子（私の弟達）が召集され、男は父だけでした。

当時、私は父母を助け、額に汗して鍬鎌（すきかま）を振ったのでした。お蔭で私共の家族も多いに助かりました。或とき、父は笑顔で言いました。「チカの働きはたいしたものだね……」と。

その頃、私は父の所の野菜を貰い一、二度の行商を体験しました。

私の所から北へ一里半、そこが旧境町です。そこまでの約一里程の利根川の堤防沿いをリヤカーを引いて、人々とも出会うこともなく一人黙々と、やがて町に辿り着きました。そして、私のにわか行商が始まりました。新顔の私に「八百屋さん何処から……」などと声を掛けられたり、又次回の注文などもありました。しかし、私にとっては大変な勇気のいる生まれて初めての体験でした。

ここでも出征兵士を送る旗が門先にはためいていました。この間、夫は遠くスマトラの野戦郵便局に従軍するための「自宅待機」をしていたのでした。

そして昭和二〇年八月十五日、血みどろの戦争は遂に終りを告げたのです。

敗戦以後は戦争など永久にあってはならない、起こしてはならないのだと強く心に誓っているところです。

やがて来るべき二一世紀、地球上のあらゆる生物が、生き生きと輝ける世紀になることを願っています。